

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻 英語教授学領域
氏名 ブラッシュ鳥越 智美

【論文題目】 日本人中学生を対象とした英語力の測定に関する研究
-Elicited imitation test の活用とその示唆を中心として-

【授与する学位の種類】 博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、学習者の口頭産出能力を測るテストとしてのEI (Elicited Imitation: 誘出的模倣) テストを、日本人中学生に対して実施し、結果の評価が可能かどうかを明らかにすることが主な研究目的であるとしている。

序章では、現状において中学生の話す能力を測定するテストが一層求められている本研究の背景を述べるとともに、聞いた文をポーズを置いてできる限り正確にリピートするEI がそのニーズに応える可能性を指摘している。また、研究課題として以下の3つのRQ(Research Question: リサーチ・クエスチョン) を提示している。

RQ1: 日本人中学生は7語以上の英文をEI テストでどの程度正確にリピートできるのか。また、文法、語彙、流暢性という3つの異なる観点で採点した場合、能力の違いによってどのような違いが得られるか。

RQ2: 絵が有る場合と、絵が無い場合のEI テストの結果は、どのように異なるのか。

RQ3: EI テスト中の参加者の思考・意識は、どのような状況であるのか。

第1章の先行研究では、予備的研究で実施する指導法としてのフォーカス・オン・フォームとその認知プロセスの検証法としての刺激再生法等とともに、第二言語習得理論 (Gass & Selinker, 1994)、スピーキングの言語処理理論 (Levitt, 1989)、認知的情報処理理論 (Mayer & Moreno, 2002; Clark & Pavio, 1991) 等のモデル、刺激文・採点方法等を含むEI テストの方法について詳細にレビューし、各RQに関わる理論モデルを示唆している。また、混合研究法、内的妥当性のためのメンバーチェック及び外的妥当性のための厚い記述を含む質的研究の妥当性、テストの妥当性としての内容的妥当性・結果的妥当性等や採点方法の妥当性について仔細に検討し、妥当性を適切に確保するための方向性を示している。

第2章の予備的研究では、フォーカス・オン・フォームによる指導法と刺激再生法等の実施がEI の開発の方向性に繋がったとしている。また、EI の予備的な実施が、刺激文の長さ・スピード、ポーズ・リピートの制限時間等のテストの手順、採点方法・基準の検討とともに、テストの特に内容的妥当性の確保に寄与したとしている。

第3章の研究方法では、研究Iとして、24名を対象にポーズを置かずにリピートするIR (Immediate Repetition) と絵無し EI を行い、研究IIとして、6名を対象に絵有り と絵無し EI を実施している。非言語の絵が処理を促進するとする認知的情報処理理論を考慮して、短時間の絵の提示後に刺激文の音声を聞くことにより、絵を文の内容に意識を向けさせるために使用した。また、リサーチデザインを、量的データ (テスト結果) と質的データ (テスト後のインタビュー、刺激再生法により収集) を同時期に収集する混合研究法に基づいた探索的研究として位置づけている。さらに、研究Iの3名、研究IIの6名を対象としてケーススタディを行った。研究Iと研究IIの参加者、研究IIの絵有りのEIへの参加者3名と絵無し EIへの参加者3名はそれぞれ異なっており、結果への順序効果の影響を避ける配慮を行っている。全体として、RQ1、RQ2には混合研究法、RQ3には質的分析を適用している。妥当性とともに、クロンバック α によるEI テストの信頼性、カッパ係数による評価者間・評価者内信頼性の検証・確保を行っている。また、NRT (Norm Referenced Test: 集団基準準拠検査) と研究I、

研究ⅡのEIの結果の相関、英語能力によるEIの結果の有意差を統計分析している。

第4章の研究Ⅰ、第5章の研究Ⅱの分析結果は次の通りである。研究Ⅰ、研究ⅡでのEIはGaillard (2014)、Gaillard and Tremblay (2016)の採点基準を参考にして、文法、語彙、流暢性の3つの観点による基準(ルーブリック)に従って評価された。研究Ⅰの絵無しEIでは、スピーアマンの順位相関係数による分析の結果、3つの観点全ての結果とNRTの「話す力」との相関が最も高いことが判った。クラスカルウォリス検定の結果、全ての観点において、能力により分けた3群間で有意差が見られた。ケーススタディでのインタビューの結果、IR、絵無しEIにおいて点数が高かった参加者はリポート中に文の内容を思考する傾向があった。研究Ⅱでは、NRTの4技能の各結果とEIの3つの観点全ての間で強い相関があった。また、各観点毎には能力による有意差はなかったが、3つの観点の総合得点では有意差が見られた。マンホイットニーのU検定の結果、3つの観点全てにおいて、絵有りとは絵無しのEIの有意差は見られなかった。ケーススタディでは、刺激再生法による質的分析の結果、絵有りのEIでの参加者の絵の影響への感じ方は異なることが判ったとしている。

第6章の考察では、RQ1との関係では、EIが参加者の口頭産出能力を弁別できる可能性を示唆しているとしている。RQ2については、能力の高い参加者は絵の有無にかかわらず、文の意味に意識を向けることができるが、能力の程度によっては、絵の情報処理が円滑に行われなかった場合があるとしている。RQ3に関しては、リスニング、ポーズ、リポートの各プロセスにおける思考・意識は、能力が高い場合は、意味、単語、文法を含む多くの要素に意識を向けるが、能力が低い場合は、絵の有無にかかわらず単語に意識を集中する傾向があると指摘している。

終章では、能力によりリスニングからリポートまでの思考・意識の内容が異なること、また、絵を刺激文の意味に注意を向けさせるために使用した結果は、言語処理、認知的情報処理の理論等のモデルへの示唆であるとしている。また、今後の中学校でのEIの話す能力を測るテストとしての更なる発展可能性を教育的示唆として述べている。

中学生を対象とした、EIに関する混合研究法に基づいた探索的研究は管見では見られないこと、また、理論モデルも踏まえて、絵有りと絵無しのEIを実施し絵の影響を分析するとともに、刺激再生法を使用した綿密な質的分析により、EIの各段階毎の参加者の意識・思考について考察していることは、本論文の独自性と研究上の意義である。また、質的研究の妥当性、テスト・採点方法の妥当性・信頼性等についても十分に検討・配慮している点は評価に値する。

以上により、本論文が博士(文学)の学位を授与されるための十分な資格を有していると判断した。

【最終試験の結果の要旨】

最終試験は、平成29年1月23日(月)に、審査委員会委員5名の出席のもとに実施された。最初に本人から学位論文の概要に関する発表が英語でなされた後に、口頭試問が行なわれた。審査委員会委員からの質問に対して、本人から学位論文における研究の目的と意義、方法、結果と考察、示唆及び関連領域の専門的学識に基づいた応答が適切に行われ、申請された学位論文が博士（文学）の学位を授与するに値する水準にあることが確認された。

よって、本審査委員会は最終試験を合格であると判断した。

【審査委員会】

主査 山下 徹
委員 片山 圭巳
委員 福澤 清
委員 大野 龍浩
委員 バウアー トビアス